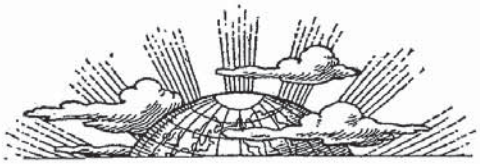

キリスト教・近代化・ナショナリズム
東北アジアキリスト教史学協議会東京大会報告

渡辺祐子

2000年の第一回大会以来、今年で五回目を数える東北アジアキリスト教史学協議会（North East Asia Council of Studies of History of Christianity）国際大会が、2006年8月21日から23日の三日間、「キリスト教、近代化、ナショナリズム」をメインテーマに明治学院大学白金キャンパスで開催された。同協議会は、韓国教会史学研究院院長（当時）閔庚培氏の熱心な働きかけに、キリスト教史学会（荒井献理事長、当時)と中国・香港のキリスト教史研究者が応じ、1999年に発足した国際学会である。韓国、中国、日本のキリスト教史研究者の交流を学術、信仰の両面においてはかることを目的とし、基本的に毎年三国が持ち回りで会議の開催責任を負っている。持ち回りといっても、日本での開催は、大教会の豊かな経済力を背景に多くの働き手に恵まれている韓国と同じようなわけには行かない。それでも大西先生と私を含む大会実行委員は、少ない人員で出来るだけのことをしようと、前年の韓国大会が終わった直後から日本での開催に向けて準備に取りかかった。開催費用をどうやって捻出するかという問題と並んで会場選びも難航したが、橋本茂所長のお計らいでキリ研に事務局をおき、明学を会場とすることが決

定した時は、実行委員一同どんなにほっとし、嬉しかったことか。「これで大会の成功は間違いない」と仰った方がおられたほどであった。

予稿集の編集、大会次第の作成、ホテルや食事の手配等、様々な準備の中でも最後まで心配だったのが、果たして招聘した5人の中国人研究者が予定通り全員来日できるのかということだった。中国ではたとえ学術会議であったとしても、「キリスト教」と名のつく集まりの場合、常に自由に参加できるとは限らない。それが外国で開かれるとなるとなおさらである。私自身も、四川で開催されるはずの中国キリスト教史研究の会議に参加を予定していたが、直前になって会議そのものが政府の横槍で中止になるという経験をしたことがあったので、当日彼らの顔を見るまでは気が抜けなかった。しかし私の心配は杞憂に終わった。招聘した中国人研究者が全員会議に出席できたのは、香港大会を除いては今回が初めてである。これまで大陸の研究者の参加がなかなか難しかったのは、大会会場がキリスト教の研修施設やホテルだった（日本での前回の大会は国際湘南村で開催）ことと関係がある。こうした施設での開催は、正真正銘国際学術会議なのか、単なるキリスト教の集会ではないのかという疑いを持たれやすく、そのために出国が許されないケースが生じたわけである。今回は明学を会場としたことはもちろんのこと、連絡先も大学内の研究所であったことが幸いしたといえると思う。

こうして中国からの5名に加えて、韓国人研究者19名をお招きし、日中韓合わせて10名による研究発表と、今回新しい試みであるシンポジウムの二本立てによって、活発な議論が交わされた。シンポジウムに先立って行われた駒込武京都大学助教授による基調講演「ナショナリズムとキリスト教のあいだ」とその後の議論や、個別発表と質疑応答の詳しい内容については、雑誌『福音と世界』2006年12月号の拙稿をお読みいただければ幸いである。最後になるが、教学補佐の石垣博美さんは、大会の準備から当日に至るまで骨身を惜しまず献身的に働いてくださった。彼女の働きがなかったら、大会運営は実に心もとないものになっていただろう。またキリ研を事務局として用いることを快諾してくださった橋本先生、当日所長に代わって御挨拶くださった水落先生、礼拝を担当してくださった北川牧師、オルガニストの西尾さん、そして久世学院長に心から感謝申し上げたい。

（わたなべ　ゆうこ
所員・教養教育センター助教授）

東北アジアキリスト教史学協議会大会の様子